

平成28年度 英語が好きになる学校づくり 取組報告書

| | | | | | |
|------|----|-----|-----------|-----|--------------|
| 事務所名 | 中部 | 学校名 | 花巻市立東和中学校 | TEL | 0198-42-4221 |
|------|----|-----|-----------|-----|--------------|

生徒の英語に対する興味・関心を引き出し、英語を学習する意欲を高めることを目指して、指導体制や環境構成について吟味工夫し、学校体制で英語教育の充実を図る。

【ねらい】

- 1 英語科としての連携指導体制を構築する。
- 2 生徒が英語を好きになる環境づくりを進める。

【具体的な取組】

1 英語科連携指導体制づくり

(1) 定期的に英語部会を開催する。

- ア T・T (1・3年生で実施) の時間を利用して、指導や資料について共有を図った。指導観の共有のみならず、特にも入門期は小学校外国語活動で培った音と文字をつなげる大切な時期であるので、1年生での少人数指導 (TT) は価値と効果があった。
- イ 3名の英語科が空き時間になる時を利用し、定着度の低いポイントなどを情報交換することができた。

(2) 指導法について情報交換しながら効果のある指導法を共有し、共通実践する。

東和中学校英語科の指導目標

<自分の考え・意見を持ち、英語で表現できる生徒の育成>

これを目標に掲げ、「発信力のある生徒」を目指して、指導を重ねてきた。

共通実践した内容は次の2つである。

ア Basic Dialog の活用

- (a) ワンセンテンスプラスの活動、ジェスチャーを交えながら相手を意識して伝える姿勢を重視する。(暗唱をペアでさせ、生徒の活動を教師が見取る。)
- (b) 場面設定の吟味を行う。

この (a) (b) の2つを意識させ、活動を試みた。いくつか例を紹介する。

例1) A : It' s almost noon. I' m hungry.

B : There is a good restaurant near here.

A : Shall we go there?

B : Yes, let' s.

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 2 p. 44)

例えば、この場面において、最初、生徒たちは友達同士の会話と判断する。しかし” Shall we~? “から、友達にしては距離感があるとなる。だったら誰だろう・・・?と子供たちの想像力が、場面をいろいろなものに変化させていく。「初デート?」という意見は、なるほど面白いと思った。実際の会話では、” There is a good restaurant near here.” を言いながら、スマホをいじるジェスチャーをする子も出てきた。現代の文化を反映しているジェスチャーだと感じた。

例2) A: Do you have any hobbies?

B: Yes. I enjoy watching anime. How about you?

A: I like collecting anime goods.

B: Then let's go to ANIMATE in Morioka.

A: Why not? Let's go.

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 2 p. 62)

これは、Basic Dialog をベースに自己表現へと活動の場を広げた会話である。もともになる形から、生徒たちは様々な場面、人間設定を行い、会話を作り出す。この活動によって、生徒が自ら考えを持ち、相手を意識し発話をする。友達の趣味など、長く一緒にいることにより知っている情報を共有しながら、会話を作り出していくこの活動は、生徒たちにとって楽しい活動の一つとなっている。

イ 視写 セカンドノートの使用

音読練習をしたのち、以下の数値を目標に、教科書の視写を行った。視写をした後、書いた英語の語彙数を記録し、自分の成長を確認できるようにした。視写する3分間の静寂は、心地よい時間となった。

↓
1年生 初期 3分間で20語以上
2年生 3分間で60語以上
↓
3年生 3分間で70語以上

音読後は、チャンクなどの意味のあるつながりを意識しているので、心の中で音と文字をつなげながら、さらに意味のまとまりを考えて視写することができるようになる。3分間の時間の中で、できる生徒は暗記をして書きとる（暗写と呼んでいる）ことができた。

また、本校でいう音読練習は、以下の数値を目標にしている。

↓
1年生 120 w p m
2年生 120～150 w p mへ
↓
3年生 150 w p m

そして、1分間に読んだ語彙数も記録させた。記録していくことにより、競争する相手が常に自分であり、達成感が得られ、さらに充実した活動となった。

(3) 補助教材アーカイブスを作成して、資料ソースを共有することで、資料作成の軽減、内容の吟味、指導の方向性の統一を図る。

本校では、生徒作文をデータ化し、共有フォルダーに保存している。それは、次の3つの目的をもって行われている。

ア リーディング力向上

例えば、職場体験のレポートのデータ化について触れてみる。そのデータ化されたものは、印刷物として生徒に配布することができる。その英文は、同じようなタイプのものであり、大量に読むことが可能な読み物教材である。よって、リーディング力向上につながる。

イ リーディングに対するモチベーションの向上

卒業生の作品であるため、自分が知っている人が書いた文となる。よって、興味を持ってその人たちの作品を読むこととなる。積極的に英文を読もうとする良い動機付けとなる。

ウ 学校としての表現力向上

データ化した過去の生徒の作品を読ませることにより、前年度よりも今年、今年よりも来年の生徒の力が、確実に作品がよくなる。例文の上にさらに一文を足すことができるので、生徒たちの表現力が付いてくる。この流れが、学校としての表現力の向上へとつながっていく。

2 英語が好きになる環境づくり

(1) 「English Room」の設置

空き教室を活用し、理科室や音楽室など同様に「English Room」を開設した。英語の授業はここでされる。教室に入った瞬間から“Hello.”と話しかけ、英語学習の雰囲気作りも容易にすることができる。

教室の備品整備に係り、他校から廃棄する机と椅子を譲り受け、この教室に運び入れた。その際、他校への連絡を校長や副校長が行い、技能公務員が出かけて机と椅子を搬入してくれた。生徒たちが雑巾できれいにし、教室に入れた。このように、学校体制での協力があり、生徒たちが自ら動き、教師・生徒と一緒に作った教室であることも付け加えておきたい。たくさんの人たちの力を借りて「English Room」が実現した。



(2) 「English Room」内の掲示の工夫

ア 英語情報を掲示し知的好奇心を引き出すための掲示

教師の願いが詰まった掲示となるよう精選吟味した。

特に、正面には「コミュニケーションに必要な心構え」について掲示している。英語を学ぶベースには、コミュニケーション能力の育成が必要とされているからである。また、コミュニケーション能力は、すなわち「人間力」。人間性を高めるための視点を常に掲示から目にすることにより、英語でのコミュニケーションもスムーズに行われると考える。

イ 指導に必要な情報の掲示

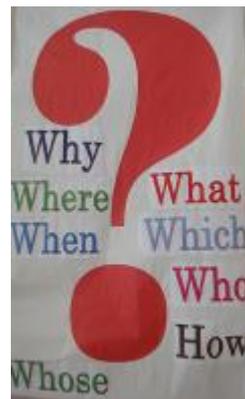
曜日、月、疑問詞、感情、代名詞などが使用頻度の高い掲示から、音声指導に必要なものまで、指導で必要なものを掲示した。それらは、「自立」した学習者育成のために必要な掲示である。

本校で考える「自立した学習者」とは、次の3つの観点で捉えている。

自分の力で、a) 書かれた文字を音声化し、正しい発音で音読できる。

b) 自分の力で、自分の意見を発信できるための、文法力が身につけることができる。

c) 自分の力を、さらに伸ばすための目標を持つことができる。



「自立した学習者」を育成するため、3つの観点について次のような指導を行っている。

a) 文字と音声について

音と文字をつなげることができる手立てがある教室を目指し、発音記号を掲示した。

1年生の段階では、初見で文字から音を考えて読むことができることが目標と考える。小学校の外国語活動で培った力すなわち「音」と、中学校で本格的に学習する文字とを丁寧につなげて指導し、できるだけ正しく読むように支援していく。2年生では、文字からだけでは正しい音で読むことができない単語を、発音記号を頼りに読む活動を展開していく。初見で、「発音記号」を頼りに正しく音読することができる力がつくよう支援していく。そのために、発音記号の掲示は必須となる。英文を読む時、心の中（頭）の中で、必ず音声化して黙読するため、読める子供たちに育てていくのは必須であると考え。これらの考えのもと、教室には常に発音記号に関する掲示がある。



b) 意見を発信できるための文法力について

日本語と英語の語順の違いがはっきりと分かるように、日本語の文構造（主語・述語）と英文のしくみを掲示した。この指導に関しては国語科との連携が必要かつ有効である。特に「名詞、動詞、形容詞、副詞」などの用語は、英語の方が先に出てくるため、1年時での連携は大切だと考える。

また、英語は日本語と違い、語順が命である。日本語は単語を並べると、言いたいことがある程度伝わるが、英語では語順が正しくないと全くと

いっていいほど意味をなさない。よって、文法に関する掲示を、常に目にできるように工夫した。また、最低限3つの「文法のフィルター」を通すことによりミスが減ることが分かったので、その3つの「文法のフィルター」を掲示した。



c) 個人の能力をさらに伸ばす学習について

絵本や英語検定の問題や英語の情報誌、そして英英辞典までたくさんの本を配置した。図書室にあった英語の本を移動し、授業の前に好きな本を手にとることができるようにした。また、1年生の入門期で、音と文字をつなげる活動の中で有益な絵本（「HOP on POP by Dr. Seuss」）や、3年生で読むことができる絵本

（「Frog and Toad are good friends.」 by Arnold Lobel）を40冊ずつそろえ、一斉に読むことができるようにした。入門期の絵本の音読は、生徒に成就感を与え、小学校の外国語活動とは異なった文字の世界へと視野を広める重要な役割を果たすと考えている。



また、英語を得意とする生徒は、英語の情報誌や絵本を見ては、「原書で読んでみたい。」との気持ちを持つ。他には、世界地図を2種類（アメリカで購入したものとオーストラリアで購入したもの。つまり、北半球と南半球で作られたもの）など珍しい視点での掲示も興味を引く。これらは生徒の外国への興味を掻き立て、English Roomは自ら目標を立てて学習する環境になりつつある。

ウ その他の工夫

バーコードリーダーやフラッシュカードなどの英語用教具が置かれてある。また、古くなったピクチャーカードや以前使用していた教科書の再利用、諸外国のお金、視写や音読の時に時間を計るストップウォッチ（2人に1つずつわたる数のもの。現在20個）も保管している。

(3) 生徒作品の掲示、保管

この「English Room」では、卒業生の直筆の英作文や、授業用のノートなど、手に取ってみることができる。実際の学習の軌跡が見て取れるので、生徒たちのやる気の向上の手助けになっている。壁面には、今年度の文化祭での展示や、授業での作文を掲示したりもしている。現在は、海外派遣事業に参加生徒が模造紙にまとめ、体験を報告したものを掲示している。



【成果】

1 英語科としての成果

- (1) TTなどを利用しながら、有効な指導方法を模索することができた。
- (2) お互いが普段から授業を見合うことができるため、授業力向上につながった。
- (3) 教材教具を一か所に集中管理できたため、指導に関わる様々な作業の軽減へとつなげることができた。

2 環境づくりとしての成果

- (1) 子どもたちが意欲的に学習するために、視覚に訴える「English Room」は、英語を使ってコミュニケーションを図る動機付けに適した教室であると、子どもたち自身も感じられるものにする事ができた。
- (2) 管理職をはじめ、用務、研究主任、国語科など、様々な分掌の先生方の協力を得ることができた。学校づくりはまず職員の理解が得られなければ始まらない。これを機会に、職員に英語科の取り組みに関心を持っていただくことができた。英語科の指導方法（時間を決めて音読や視写をすること）を、社会科や国語科で実践できないかなどの意見もいただき、学校としての研究につながる可能性を見出すことができた。
- (3) 図書館担当の提案により、校舎のいたるところに本を置くことができている。英語に関わる本は、「English Room」に移し、充実することができた。教科の枠を超えて協力体制をとることが、環境づくりに大きく寄与してくることを実感できた。

3 実績としての成果

- (1) 今年度は英検受験者が多くなった。2年生ではすでに3名が3級を取得し、1月の受験には、3名が準2級、5名が3級を受験予定である。学年以上のレベルに挑戦しようという生徒たちが今年度は多い。それを支援するため、昼休みなどに「English Room」で、英語科の教員と学習を続けている。